

蘇州日本人学校における国際理解教育の実践

—— 文化体験・現地校交流を通して ——

前蘇州日本人学校 教諭

茨城県ひたちなか市立勝田第二中学校 教諭 佐々木 翔太郎

キーワード：在外教育施設、蘇州、現地理解、国際交流

1. はじめに

(1) 蘇州の概要

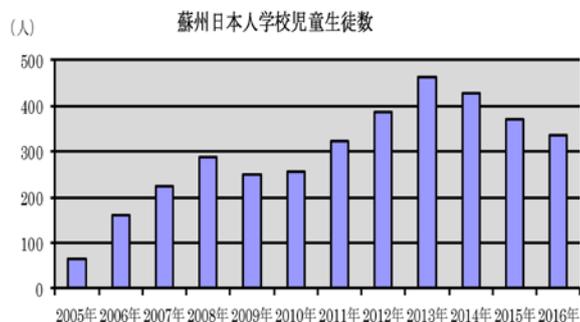
蘇州日本人学校のある蘇州市は、中国の南東部にある江蘇省に属しており、東は上海、南は浙江省、西は太湖、北は長江に接している。蘇州の歴史は古く、紀元前514年、今から約2500年前の春秋時代に、「呉」の国の都として建てられた。風光明媚で交易が盛んな蘇州は、『東洋のヴェニス』とも呼ばれてきた。市内に残るいくつもの庭園は、宋、元、明清、各王朝の建築の様式を伝え、そのいくつかは世界遺産に指定されている。



(2) 蘇州日本人学校の概要

蘇州日本人学校は、蘇州日商倶楽部が設立母体であり、日本政府の補助を受けて運営している私立の学校である。日本国内の学校と同様に、小学校・中学校学習指導要領に基づいたカリキュラムを実施している。学校教育目標「未来に向かい明るく元気で心豊かな子どもの育成」の実現に向け、日々の教育活動を進めている。

蘇州日本人学校は、日本人学校としては中規模の学校である。学校の設立は2005年。児童生徒数は、当初は右上がりに急増していたが、2013年を境に減少に転じている。ここ数年の学級数は、各学年1から2学級で推移している。小学部6学年、中学部3学年の計9学年が、日々、共に活動している。



2. 実践内容

(1) 特色のある教育活動

① 蘇州・中国文化体験

蘇州日本人学校では、蘇州や中国の文化に触れることや、週1～2回実施している中国語の授業の実践の場を設けることを目的として、年に1回、「蘇州・中国文化体験」（以下、「文化体験」）を行っている。「文化体験」では、蘇州や中国の文化の中から、学年の発達段階に応じた内容を選び、講師の先生方をお招きしたり、

施設を訪問したりして、実際にその文化を体験する中国に住んでいながら、きっかけがないと自分から触れる機会が意外と少ない子どもたちにとって、本物の文化に直に触れることのできる貴重な場となっている。また、「文化体験」は、例年、学校公開週間に行っており、参観する保護者の中には子どもの製作活動を手伝ったり、一緒に体験に参加したりする方もいる。



中国結



中国武術「五步拳」

②現地校交流

蘇州日本人学校では、コミュニケーション力や相互理解の素地を養うことを目的として、年に1回、現地校交流を行っている。学年、年度によって、現地の学校を訪問する場合と現地の児童生徒を招待する場合がある。

赴任2年目、H28年度の現地校交流は、現地の児童生徒を招待する立場として迎えた。従来は、コミュニケーションや相互理解を目的と据えるといっても、学校案内など、どうしても中国語の堪能な子だけが活躍してしまう活動に偏っていた。しかし、せっかく毎週中国語を学んでいるのだから、うまくいなくても、自ら話そうとすることを通して、コミュニケーションの難しさと、少しでも成功した時の喜びを味わわせたいと考えた。

そこで、H28年度の現地校交流から、小グループでのフリータイム交流を取り入れることにした。3~5人程度の小グループ同士で組になり、予め自分たちで考えておいた内容で交流する。交流内容は、グループによって、椅子取りゲームや指スマ、日本の教科書や教材の紹介などであった。

普段、習ってはいても使う機会はほとんどない中国語を実際に使い、上手く通じて喜んでいる子がいた一方で、中国語が苦手な子の中には、ほとんど話せずに終わった子もいた。もちろん、ネイティブの子たちの活躍は言うまでもなかった。結果は様々だったが、それぞれが、語学の難しさと大切さを改めて感じる事ができたようで、貴重な経験をさせてあげられたと感じた。中国語担当の先生からは、「これこそが生きた交流だ」と評価していただいた。この活動は翌年も続き、子どもたちの現地理解・国際交流の場としてとても貴重なものとなった。

3. おわりに

3年間の派遣を通して、国際理解や現地理解に努めていくことが改めて重要だと感じる事ができた。自分自身も中国に実際に暮らすことで、中国という国のもつパワーや中国の人達の温かさを感じる事ができた。今回学んだことを生かし、様々な国を理解し、国際的な視野に立って物事を考える事ができる、そんな子どもたちの育成に努めていきたい。